

初期大乘經典における「書写」について

朝 山 一 玄

はじめに

『般若經』類や『法華經』をはじめとする多くの大乘經典には、しばしば經典の受持、讀、誦、解説、書写の功德が說かれるが、それらを実踐する者は「五種法師」とも呼ばれる如く、大乘經典護持者の模範とされている。しかし各經典の記述から見ると、それらの実践行は最初から「書写」を含む五種を以て說かれていたわけではないようである。そこで本稿では、初期大乘經典にみられる經典護持法を概観したうえで、『道行般若經』の記述を検討して、「書写」說の成立について考えてみることにしたい。

一

仏滅後の第一結集以来、教法はダルマダラ等の暗誦専門家によって伝持されていたが、經の解説や説法が必要となるに至ってバーナカやダルマカティカがその役割を担うようにな

った。バーナカは *Mahāvastu* において音楽家の一種とされていることから、經典暗誦者としてその朗詠や解説に携わっていたことが知られ、ダルマティカも阿含經などに拠って説法を行っていたようであるが、いずれにしても彼らは各經典の内容を全て憶持していたのであり、彼らのような職能を持つ人々によって教法が伝持される状況が続いていた。

このような経緯の下、大乘經典もその多くは、初期においては憶持、暗誦、解説によって伝持宣布されていたらしく、後漢から西晋代迄に訳出された初期大乘經典には、主として経末、囑累の部分で、經典を「持、誦、説」することによって後世に伝持していくべきことを述べるものが多い。

阿難、若復有人聞是經典、受持諷誦広為人説。於中作諸功德、為已供養去來今仏。

世尊、其聞是經、當得善利無極之慶。何況受持諷誦學者。我當受持諷誦修學、広為人説普令流布。

若有族姓子女、受此經法、広為他人分別說者徳不可量。假使有人

……典設布施、不如受持諷說此經³。

これらの記述にみえる「受持」「諷誦」「説」等の語は、梵文の存する經典で照合してみると、「受持」が $\sqrt{dh}$ 、或いは $ud-\sqrt{grah}$ $\sqrt{v}$ $\sqrt{dh}$ 「諷誦」が $\sqrt{vac}$ $\sqrt{v}$ $\sqrt{dh}$ 「説」が $\sqrt{pr}$ - $\sqrt{v}$ $\sqrt{dh}$ などに対応しており、「聞いた内容を憶持して、暗誦し、解説すること」を表わしていることが確認される。阿難のみならず善男子善女人にも教法の受持が求められていることは、その支持者の多くを在家者が占めていたという事実の反映であるが、彼らには長大な經典の受持は困難だったためであろう、いくつかの經典には「四句頌」や「經典之要」、あるいは「呪」の形で受持を求める記述も見られる。

若受是經雖不能多、受四句頌諷誦宣布為他人説、福不可計德無崖底³。

若於千行六度無極、……不如聞是經典之要福多於彼。何況至心受持諷誦、宣示同輩⁵。

今是神呪過去當來今現在仏所説。……我當受此經典之要、精進誦當令広普⁶。

このように初期大乘經典には、暗誦傳承の伝統を承けて受持諷誦解説による伝持を説く經典が多く、書写を取り挙げる經典はそれほど多くはない。しかし、次にあげるように最初の訳出では書写を説かなかった經典が、後の異訳ではそれを取り入れている例も見出されるし、經典書写の普及が大乘經

典流布の大きな要因の一つになったことは、書写の功德を説く『般若經』や『法華經』の写本が多く残されていることから明らかであろう。

『阿惟越致遮經』と『不退轉法輪經』

。吾等之類、從今日始受是經本持諷誦説⁷。

。我等從今以往、當受持説誦書寫此經⁸。

『大哀經』と『大集經』陀羅尼自在王菩薩品

。若族姓子族姓女、……聞如此經典之要、持諷誦説具為人説、得福無底⁹。

。若有善男子善女人……得聞如是方等經典、受持説誦書寫演説……得無量功德¹⁰。

「持、誦、説」による伝持を説いていた經典に「書寫」が導入される状況をはっきり認め得るわけであるが、それでは前述したような暗誦傳承の伝統を破って書写を普及させるきっかけとなったものは一体何だったのであろうか。そこで諸經典の記述を検討してみると、どうやら般若經がその嚆矢となった可能性が高いことが認められる。般若經類の最古訳である後漢支婁迦讖訳『道行般若經』は第三「功德品」で經典書写を説いているが、「功德品」は「道行品」「難問品」と共に『道行』中で最古の部分と推定され、その成立は紀元前後頃迄さかのぼり得ると見られており、その書寫説は他のどの經典のものよりも古いと認められるからである。『法華經』

も各所に書写を説いてはいるけれども、初出は西晋竺法護によるものであるし、布施浩岳博士をはじめとする先学は、原『法華経』は「持、誦、説」を説くのみで書写は後に導入されたもの、とされているから、ここでは論議の対象にはなり得ないであろう。また、『道行』と同じ支婁迦讖の訳出になる『阿閼佉王經』『阿閼世王經』『般舟三昧經』（最古訳は『拔陂菩薩經』）にも書写は取り挙げられるけれども、いずれも簡単な形に過ぎず、『道行』における「経巻供養」のような必然的な理由もそれらにおいては明らかではないから、支讖の挿入とは言えないまでも、他經典に影響を及ぼす程の書写説をそこに認めることはできない。

そこで次に、大乘經典における書写の普及の原点となつたと思われる『道行』の書写説の内容とその成立の背景について検討してみることにした。

二

大乘經典最初の書写説は『道行』『功德品』のものとみられるわけであるが、ここでは、書写は經典の伝承のためではなく、経巻供養の手段として取りあげられている。

同一句の反復が多いことなどのために「功德品」は極めて分量の多い章であるが、そこには(一)般若波羅蜜を「持誦」すれば大きな功德があること、(二)それが不可能なものは書写し

た経巻を供養すれば仏塔供養よりも大きな功德があること、(三)書写した経巻を他人に与えて書写させ、読み、解説すれば大きな功德があること、がそれぞれ繰り返し述べられている。その中で書写に触れるのは(二)と(三)の部分であるが、「功德品」構成の中心となり、分量も多い(二)の部分が、問題となる、教法の書写供養を説く箇所である。その(二)の部分は、次の形の文章の繰り返しで主要部が構成されている。

善男子善女人、恒薩阿竭般泥洹後、取舍利起七宝塔供養、尽形寿自歸作礼承事、持天華……作是供養其福寧多不。釈提桓因言、甚多甚多天中天。仏言不如是。善男子善女人、書般若波羅蜜持経卷、自歸作礼承事供養、名華……得福多也。

経巻供養が仏塔供養と対比されていることから明らかにように、『道行』の成立当時は仏塔信仰が盛んだつたのであるが、『般若経』製作者は、仏塔内に安置される肉身の仏陀の舍利よりも、仏陀を仏陀たらしめた根元的な智慧、般若波羅蜜により大きな価値を認め、それを供養する方が多くの功德が得られる、と主張した。色身、法身の二身説は『道行』には未だ明確ではないけれども、「仏経身」の語も見出される如く、彼らは仏陀の物理的身体と仏陀の本質である智慧、真如とを明確に区別していたのである。そして、その智慧、般若波羅蜜を供養する手段として、それを書写して経巻にすることを要求するに至つたのである。

「覚品」における、法師 dharma-bhāṇaka と和合しなければ書写ができないことを表す記述や、「薩陀波倫菩薩品」の、法師である法上菩薩の説法を聞いてそれを聴経者が書写する記述から見て、法師の誦出する経を書写するのが一般的な方法だったらしい。なお、供養には触れずに書写のみを説く記述も経中に少なからず見られるが、「嘱累品」最終部分には再び書写した経巻の詳しい供養方法を説いて経を終わっていることからしても、『般若経』製作者が善男子善女人に第一に求めた実践が「書写供養」であったことは明らかである。

このように書写は『道行』において経巻供養を目的として始められたものであることが確認されるわけであるが、それによる多大な弘経効果を評価して元来憶持によって伝持されていた經典も積極的に書写を導入することになったらしい。右に述べたように『道行』は「書写供養」を一つの実践としていたから、『法華経』『阿閼仏国経』『成具光明定意経』等の經典は「書写供養」をそのまま導入しているけれども、多くの經典は憶持伝承の困難を打開する手段として、「供養」を省いて書写のみを採用していることが認められる。しかし、「書写供養」を導入していた經典も、右の『阿閼仏国経』において異訳の『大宝積経』不動如来会では供養が消えて書写だけが残されているように、書写が經典伝持法として一般化

するとともに、經典の所説からして必然性の伴わない「供養」は略されていった如くである。そして前述したような事情の『般若経』と、一乗の法を確立してその經典を絶対視する『法華経』とに経巻供養が残ったものと思われる。

おわりに

經典書写は、スリランカ史伝によれば既に紀元前一世紀に行われていたということであるが、大乘仏教における本格的な普及の原点は、「仏」より「法」に大きな価値を認める般若教徒が、厳しい修行を為し得ない人々にその「法」（『経巻』）を供養させるための手段として説き出したことにあった。

- | | | | | | | | | | | | |
|------------|-------------|------------|-------------|---------|-------------|------------|----------|-------------|----------|-------------|-----------|
| 1 大正二二、三〇下 | 2 大正一一、九〇二下 | 3 大正二二、九七上 | 4 大正一四、五九六下 | 5 同、六五下 | 6 大正一五、一五七上 | 7 大正九、二二三下 | 8 同、二五二下 | 9 大正一三、四五〇中 | 10 同、二七下 | 11 大正八、四三二中 | 12 同、四六八下 |
|------------|-------------|------------|-------------|---------|-------------|------------|----------|-------------|----------|-------------|-----------|

△キーワード▽ 經典、書写、『道行般若経』

（早稲田大学大学院）